様式Ｃ－１９

科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成２４年　４月２６日現在

機関番号：３２６１６
研究種目：基盤研究（Ｃ）
研究期間：2009～2011
課題番号：２１５３０１２９
研究課題名（和文）近代政治思想史におけるエピクロス主義的伝統の研究

研究課題名（英文）A Study on the Epicurean Tradition in Modern Political Thought

研究代表者
中金　聡（NAKAGANE SATOSHI）
国士舘大学・政経学部・教授
研究者番号：90269712

研究成果の概要（和文）：本研究は、古代ギリシアの原子論哲学者エピクロスの政治思想を正義の人為性を強調するコンヴェンショナリズムとして解釈し、それが後世のモンテーニュ、ガッサンディ、ホッブズ、パスカルの道徳・政治思想に及ぼした影響を解明する。これは近代政治思想史におけるエピクロス主義的伝統の存在を確認するものであり、研究史上の欠落を補う意義がある。

研究成果の概要（英文）：This research interprets the political thought of an ancient Greek atomistic philosopher Epicurus as conventionalism of justice, and reveals its influence on the moral and political ideas of Montaigne, Gassendi, Hobbes and Pascal. This ascertains the existence of Epicurean tradition in the history of modern political thought which could not be said to have received good attention it deserves.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合　計
２００９年度	500,000	150,000	650,000
２０１０年度	400,000	120,000	520,000
２０１１年度	400,000	120,000	520,000
年度			
年度			
総　計	1,300,000	390,000	1,690,000

研究分野：社会科学
科研費の分科・細目：政治学
キーワード：政治哲学、エピクロス主義、コンヴェンショナリズム、自然法、正義

１．研究開始当初の背景

本研究課題は、本研究代表者の平成 17～19 年度科研費研究課題「レオ・シュトラウス、オークショット、ジュヴネルの比較政治哲学的研究」の成果に基づき、エピクロス主義をプラトン、アリストテレス、ストア派らの「古典的自然権理論」の最大のライバルとみなすシュトラウス、およびエピクロス主義とストア派によってその後の西洋政治思想を規定した「二つの生活様式」が提示されたとする

オークショットの所説を手がかりとしつつ、これを敷衍する形で構想された。

主として古代哲学研究あるいは倫理学研究の文脈で遂行された従来のエピクロス主義研究においては、原子論形而上学や快楽主義倫理学にかんして個別の研究蓄積は十分にあるものの、政治思想としてのエピクロス主義はほぼ完全に等閑視される傾向にあった。近代政治思想への影響という点でも、功利主義の先行思想として論及されることを除けば、概してストア派の影に隠れた存在となっていたといえる。

またエピクロス主義の影響下にあると目される近代政治思想家の研究にしても、その詳細を明らかにする試みは存在しなかった。モンテーニュについては僅かに快楽主義との関連が指摘されるにとどまる。ガッサンディの場合は、そもそも国内研究が手薄なうえに、そのエピクロス主義復興プロジェクトの全貌解明作業は海外でもほぼ手つかずの状態であった。ホッブズとガッサンディの間でのエピクロス主義継受の関係はしばしば指摘されるところとなってきたが、ホッブズ自身のテクストに照らした厳密な分析は国内外を問わず皆無に近いというのが当時の研究状況であった。パスカルにいたっては、宗教一般の批判者エピクロスというイメージが先行してきたためか、およそエピクロス主義を含む古典古代の思想とのかかわりに本格的に論及した研究はなかった。

これが本研究開始当時の背景にあった研究代表者および当該研究領域の状況である。

２．研究の目的

本研究の目的は、非政治的で観想的な哲学と目される古代のエピクロス主義を一個の政治思想として復権させ、その遺産が近代政治思想の成立に果たした役割を解明・評価することにある。そのために本研究が設定した課題は二つある。

(1)まずエピクロス主義に固有の政治思想として正義のコンヴェンショナリズムに着目し、その全貌を解明することである。この思想は、実定的な法秩序の背後に想定される超越的で普遍的な「自然」的正義の存在をみとめず、現世のあらゆる正義と法を特定の人間集団の利益のために作られた約束事（コンヴェンション）とみなす。このような「人為」（ノモス）の哲学の発掘により、プラトン、アリストテレス、ストア派の「自然」（ピュシス）の哲学に偏した古代政治哲学観の見直しを開始することが可能になる。

(2)次いで、そのようなエピクロス主義的政治思想の影響の跡をモンテーニュ、ガッサンディ、ホッブズ、パスカルの道徳・政治思想のうちに辿り、そこから近代エピクロス主義の系譜を析出することである。この政治思想的伝統は、モンテーニュの法慣習論やガッサンディ＝ホッブズの社会契約論の起源の問題にたいする有力な解となるだけでなく、キリスト者パスカルの法・政治理論に見られるリアリズムをも説明する。

３．研究の方法

本研究では、対象となる哲学者たちのギリシア・ラテン・英・仏の各原語作品をテクスト内在的、あるいはインターテクスチュアルに解読するという政治思想史の伝統的な方法を採用する。このやり方は以下の二点で本研究の特徴をなしている。

(1)本研究における思想解釈においては、テクストそのものをして語らしめることが重視され、テクスト外的な要素への言及は最小化される。この解釈の方法は、エピクロス主義を哲学的発想・問題設定、哲学的著述における表現方法とその語彙にかんする一個の通

時的な「伝統」として想定し、思想家間の相互影響・継受関係の解明を主眼とした本研究にとって、最も適切な方法である。
(2)また各思想家のテクストを解読するにあたり、引用や「脱線」、あるいはテクストの表層の矛盾などに見いだされる明示・暗黙のインターテクスチュアルな引照関係を重視する。このやり方は、特にエピクロス主義のように、伝統的に異端ないし危険視されてきた思想の伝播を解明する場合に有効である。

４．研究成果

本研究によって得られた成果としては、(1)エピクロス主義に固有の政治思想の解明、(2)政治哲学的問題としての死、および死の問題をめぐる哲学と信仰の関係の考察、(3)近代政治思想史におけるエピクロス主義的伝統を解釈枠組みとした各思想家の理解の刷新、の三点がある。

(1)非政治的な哲学と考えられてきたエピクロス主義のなかに正義のコンヴェンショナリズムを主張する一個の政治思想が存在することを明らかにし、これを後の近代社会契約論に結実する「人為の哲学」として西洋政治思想史上に位置づけた（論文「カルネアデスの講義」および「快楽主義と政治」）。
(2)「死の恐怖」からの救済というエピクロス主義哲学の究極の課題が、ラディカルな自然主義哲学による知的救済というエピクロス＝ルクレティウス的な本来の無神論的方向とは別に、アウグスティヌスらの初期キリスト教神学による批判的摂取を経て、信仰による救済という有神論的な方向においても追求されていたことを明らかにした（論文「城壁の哲学」）。
(3)近代政治思想史におけるエピクロス主義的伝統という未見の解釈枠組みを提示することによって、研究史上のいくつかの重要な問題の解決に貢献した。その具体的内容は以下のとおりである。
①モンテーニュ『エセー』の法慣習論をエピクロス主義的コンヴェンショナリズムによって理解し、それが保守主義的伝統論の重要な論拠となって現代まで持続していることを明らかにした（第 11 章「モンテーニュとオークショット――懐疑主義的保守主義の系譜」、野田裕久編『保守主義とは何か』ナカニシヤ出版、2010 年所収）。
②ガッサンディの二大主著『ディオゲネス・ラエルティオス第 10 巻注解』および『哲学集成』におけるエピクロス主義復興プロジェクトの整合的な解読によって、そこにエソテリックな著述の技法が用いられていることを指摘し、ガッサンディが同時代のホッブズに決定的な影響を与えたことを明らかにした（論文「エピクロスの帰還」）。
③ガッサンディ経由でホッブズが摂取したエピクロス主義的要素をテクストに即して詳細に分析し、そこにホッブズが加えた修正の意味を「心の平静（アタラクシア）から社会の平和へ」の哲学の目的の転換として解明した（論文「ホッブズにおける自然学と人間学」および「心の平静から社会の平和へ」）。
④パスカルの「沈黙する宇宙」にエピクロス＝ルクレティウス的な自然観の影響があることを指摘し、その神学的救済論が「死の恐怖」からの救済を哲学に託すエピクロス主義のキリスト教的変奏として解釈される可能性について問題提起した（前掲「モンテーニュとオークショット――懐疑主義的保守主義の系譜」に一部発表）。

５．主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計６件）

①中金 聡、城壁の哲学――ローマのエピクロス主義について、政治研究、査読有、第３号、2012、pp.29-70

②中金 聡、心の平静から社会の平和へ――ホッブズはどこまでエピクロス主義者か、政治哲学、査読有、第12号、2012、pp.148-82

③中金 聡、エピクロスの帰還――ガッサンディにおける哲学的著述の技法について、政治研究、査読有、第２号、2011、pp.71-105 (http://libw01.kokushikan.ac.jp/RING/data/1002372/0000/registfile/1884_6963_002_04.pdf)

④中金 聡、ホッブズにおける自然学と人間学、法学研究、査読有、第83巻第10号、2010、pp.100-110

⑤中金 聡、カルネアデスの講義――正義をめぐる二つのトポス、政治研究、査読有、第１号、2010、pp.77-96 (http://libw01.kokushikan.ac.jp/RING/data/1002018/0000/registfile/1884_6963_001_04.pdf)

⑥中金 聡、快楽主義と政治――レオ・シュトラウスのエピクロス主義解釈について、政治哲学、査読有、第９号、2010、pp.63-94

〔学会発表〕（計２件）

①中金 聡、川添美央子著『ホッブズ　人為と自然――自由意志論争から政治思想へ』に寄せて、慶応義塾大学政治思想研究会Quo Vadis、2010.7.19、慶應義塾大学

②中金 聡、レオ・シュトラウスのエピクロス主義理解について、第15回政治哲学研究会・第226回早稲田大学政治思想研究会、2009.12.19、早稲田大学

〔図書〕（計１件）

①野田裕久、中金 聡、他、ナカニシヤ出版、保守主義とは何か、2010、pp.228-248

〔その他〕

ホームページ等

６．研究組織

(1)研究代表者

中金　聡（NAKAGANE SATOSHI）

国士舘大学・政経学部・教授

研究者番号：90269712

(2)研究分担者

（０）

研究者番号：

(3)連携研究者

（０）

研究者番号：